

「2017年第11回中部NGO-JICA中部地域協議会」議事録

(以下、省略)

多田：JICA中部の多田と申します。本日の司会を、こちらにいらっしゃる名古屋NGOセンターの中島さんと共同で進めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

参加者一同：よろしくお願いいたします。

多田：まず、お手元にお配りした資料の確認をさせていただきたいと思います。とじられています。最初に議事次第があり、1枚めくっていただくと本日の出席者リストとなっています。誤字脱字がございましたら、失礼申し上げます。さらに1枚めくっていただくと、「東海市民社会ネットワークについて」という資料1があります。さらに1枚めくっていただくと、「第2回NGO-JICA協議会@北海道報告」という資料2が添付されています。資料3-1のパワーポイントのコピーが続いています。最後のページが横になっていますが資料の3-2で、「2017年度NGO-JICA協議会年間テーマ」となっています。それでは、本日の会議を進めたいと思います。では、最初に出席者のご紹介をNGO側のほうから進めていただけますか。

中島：こちらから順番に紹介します。「名古屋NGOセンター」の理事をしております。所属は「アジア保健研修所」です。中島と申します。よろしくお願いいたします。

龍田：同じく名古屋NGOセンターの理事をしております龍田です。よろしくお願いいたします。

西井：名古屋NGOセンターの理事長の西井です。よろしくお願いいたします。

戸村：名古屋NGOセンターの理事、事務局長の戸村です。よろしくお願いいたします。

杉本：「地域国際活動研究センター」の事務局長をしております、上から5番目になりますか、杉本正次と申します。よろしくお願いいたします。

丹羽：「アジア車いす交流センター(WAFCA)」事務局職員を務めております丹羽と申します。一番下の角でございます。よろしくお願いいたします。

伊藤：私、伊藤と申します。名古屋NGOセンター理事と「ニカラグアの会」の事務局をやっております。よろしくお願いいたします。

八木：名古屋NGOセンター政策提言委員の八木巖です。「ペシャワール会名古屋」にも加盟してまして、講演会のときに講演を頂いて、大盛会でした。どうもありがとうございました。

河合：「泉京・垂井(せんと・たるい)」の河合と申します。名古屋NGOセンターの加盟団体です。よろしくお願いいたします。

中島(正)：名簿下から2つ目の中島正人です。名古屋NGOセンターの政策提言委員をしています。団体は「アムネスティ・インターナショナル」の地元のグループのメンバーです。

多田：ありがとうございました。それでは、JICA側の自己紹介に参りたいと思います。

佐藤：JICA中部市民参加協力課の佐藤と申します。よろしくお願いいたします。

阪倉：JICA中部の所長をしております阪倉です。この10月はいろいろイベントがたくさんありましたが、中旬に「ワールド・コラボ・フェスタ」などもあり、一部の関係団体の方にもご協力を頂きました。その節はありがとうございました。引き続き、よろしくお願いいたします。

木下：次長の木下と申します。よろしくお願いいたします。

高坂：JICA中部市民参加協力課の課長の高坂と申します。私の課では草の根技術協力、NGO連携、民間連携、開発教育支援、ボランティア事業ですので、本日の議論や意見交換を日頃の業務に生かしていきたいと思っております。本日はよろしくお願いいたします。

岩瀬：皆さん、こんばんは。研修業務課の岩瀬と申します。前回の会議でも少し紹介をさせていただきましたが、研修事業の中でNGOの皆さんにお世話になっている、障害者支援、あるいは環境分野においてお世話になっているものが多数ありますので、今回の議論の中でもいろいろとお話をお伺いできればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

梅村：皆さん、こんばんは。専門嘱託の梅村です。そろそろ1年になって、やっと2度目の皆さんにお目にかかります。よろしくお願いいたします。

多田：ありがとうございました。以上で、自己紹介を終わらせていただきます。ありがとうございます。それでは引き続き、開会ごあいさつを名古屋NGOセンターの西井理事長にお願いしたいと思います。

西井：皆さん、こんばんは。本日はお忙しい中、「第11回中部NGO-JICA中部地域協議会」にご来場くださり、ありがとうございます。第11回なので、もう10回終わったということ。つまり、年2回の開催なので、もう5年が経過し、6年目に入りました。随分、回を重ねてきたなと感じます。この5年間にさまざまなことをJICA中部の皆さん、それからNGOの皆さんたちと一緒に取り組んでこられたかと思えます。今日も少し議題にありますが、『協働のハンドブック』を作成したり、草の根技協がより申請しやすくなる作業といえますか、そのときに名古屋NGOセンターの加盟団体の方にヒアリングをして、その意見なども反映させていただいたというプロセスもありました。それから前回、『協働のハンドブック』をより理解しようというワークショップもやらせていただくなど、さまざまなことをやってきたと思います。こういった取り組みを通じて、JICA中部の皆さんとNGOの皆さんとの対話がより促進され、対等なパートナーシップをより確認しながら連携の基盤をつくってこれたのかと思います。これからもまたさらに対話、あるいは連携を強めながら、この協議会を続けていけたらいいなと思います。

最近のNGOセンターのことをご紹介させていただくと、加盟団体を対象にアンケートを実施しました。今日の議題の中でも、協議事項の中に「NGOとJICAの協働における名古屋NGOセンターに求める役割」があり、報告をさせていただくことになっています。中身に関してはそちらに譲りますが、NGOセンターの事業が非常に広範にわたってきて少し整理をする必要があるのではないかとということで、こういう事業見直しのためのアンケートを

行いました。NGOセンターが具体的に行っている事業を加盟団体の方たちがどのように活用したのかという事実確認、事実質問に基づいて行いました。それを通じて、NGOセンターのこれからの事業の方向性、具体的な事業の見直しに着手しようというところです。何か事業を減らす、あるいは増やすということになるのかどうか、これもこれからの議論の行方によって変わってくると思います。

アンケートの生かし方に関して、私たちも本当に頭を悩ましているところなのですが、先ほど加盟団体の方と少しお話をしてみたら、「事業ベースで見直すのも一つの方向性だろうが、ネットワークNGOとして何が求められているのか。この地域で活動している国際協力団体にできないことをするのがネットワークNGOではないのか」というご意見もありました。幾つかのテーマがあろうかと思いますが、やはり「個別の団体ではできないこと」「まとまっているからできること」「ネットワークであるからできること」という視点で見直していくのも一つの重要な視点かなと思ひ、今後見直しを進めていこうと考えています。今日、協議事項の中でアンケートに少し触れさせていただいて、JICA中部の方々、それからNGOの皆さんからもご意見を頂いて、今後の見直しを進めていこうと思っていますので、皆さんのご意見等を頂ければと思います。すみません、長くなりましたけれども、少しNGOセンターの最近の動きを紹介させていただきました。以上で、私のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。

多田：西井理事長、どうもありがとうございました。それでは、1部はこれで終わらせていただき、2部の報告事項に入りたいと思います。最初にJICA中部の市民参加協力課長の高坂より、「2017年度第1回草の根技術協力」の採択内定状況、および第2回の応募スケジュールについて報告をさせていただきます。よろしく申し上げます。

高坂：まず簡単に類型についてご紹介させていただきます。「パートナー型」は金額が1億円までで、比較的経験を有した団体のご提案を頂くものです。「支援型」については金額は1,000万円までとなっています。また、「地域提案型」は現在「地域活性化特別枠」として募集しているもので、自治体からの提案が条件となっているのですが、実施に当たっては自治体のみならず、NGOや大学が実施する場合があります。以上が簡単な類型の説明になります。

それでは、まず「パートナー型」からご説明します。2017年度第1回のパートナー型は、7月6日に募集を締め切り、全国で29件の応募がありました。その中で7件が採択されました。JICA中部の所管する愛知県、岐阜県、三重県、静岡県 of 団体からの応募は4件で、採択内定は1件でした。第2回は現在募集中であり、11月30日が締め切りで、コンサルテーションを受け付け中です。

続いて「支援型」ですが、2017年度第1回は6月21日に募集を締め切り、全国で30件の応募があり、そのうち13件が採択されました。JICA中部管内の応募は2件で、採択案件は2案件でした。第2回の募集は10月30日に締め切っており、JICA中部管内では応募がありませんでした。

続いて「地域活性化特別枠」ですが、2017年度補正予算の特別枠は6月7日に募集を締め切り、全国で24件の応募がありました。そのうち8件が採択されました。JICA中部での応募は2件で、採択内定は1件でした。なお、今年度第2回の応募について、補正予算の関係上、現在のところ募集時期は未定となっています。以上です。

多田：どうもありがとうございました。今の報告についてご質問、コメント等はございますか。もしあれば、後ほどまた承りますので、よろしくお願ひします。それでは項目2番目の伊勢志摩サミット後の活動紹介。市民社会NGOネットワーク設立について、名古屋NGOセンターの西井理事長よりお願ひしたいと思ひます。

西井：私から簡単に報告をさせていただきます。お手元に資料1として「東海市民社会ネットワークについて」というペーパーが1枚入っているの、こちらをご覧ください。まず設立の経緯ですが、去年5月に「G7伊勢志摩サミット」が開催され、それを機に「市民の伊勢志摩サミット」という市民側のサミットを実施しました。そのときの呼び掛け団体が中心になって、サミット後も活動を継続しようと設立したのが「東海市民社会ネットワーク」です。市民サミットの際に「市民宣言」を出しました。そこでは、地域の課題と世界の課題とがつながっていることを意識しながら活動をして改善や解決をもたらそう。自治体や国などへの政策提言活動を続け、市民協働による政策づくりを進める。それから、市民協働による政策づくりを進めるために、新たな制度やネットワークをつくる、という3つの項目を謳い上げています。市民宣言を実現することを目的として、ネットワークを設立しました。去年の10月23日に、こちらの会場をお借りして設立大会を開催させていただきました。

目的はただ今申し上げたように、愛知・岐阜・三重3県における市民活動団体と政府自治体等との協働による政策づくりを推進しようということと、これを通じて力強い市民社会を形成していこうということが目的になっています。

運営については、市民サミットを担った呼び掛け団体を中心とする団体が5つほどありますが、そこにプラスして市民サミットで分科会を担当した団体から分科会の担当幹事として参加していただいて幹事会を構成し、これが運営に当たっています。名古屋NGOセンター関係では「泉京・垂井」ですとか、「多文化共生リソースセンター東海」「不戦へのネットワーク」、それから名古屋NGOセンター、こういったところが幹事会を構成しています。他にNPOでいくと、子ども関係の「こどもフォーラム」や「地域の未来・志援センター」、三重県ですと「みえNPOネットワークセンター」、岐阜の「ぎふNPOセンター」といったところが幹事会に参加して運営を行っています。

事業計画は、ここに3つあるように、年2回研究会を開こうということ、情報共有の場としてホームページ、SNS等で情報発信をしようということ、それから市民社会の次世代を育成するということでユースの参加促進・活動促進といったことを計画として挙げています。

去年の10月23日の設立以来、幾つかの事業も行いました。政策提言の研究会として、今

年2月に各地の市民活動団体の政策協働、地域で行われている自治体との協働事例を共有しながら、実際に実践する場合の課題について検討することを行いました。今年の5月には市民サミット1周年記念として、5月21日に岐阜・大垣でイベントを開催しました。併せて、東海市民社会ネットワークの総会も開催して、活動報告と事業計画の承認を得るという手続きもしました。記念イベントにおいては、基調講演としてSDGsの地域展開について、東京から「SDGs市民社会ネットワーク」の方をお招きして基調講演をしていただき、東海3県の中で活動しているNPOの人がコメンテーターとなり自分たちの活動がSDGsとどうつながっているかについてのパネルディスカッションも行いました。それから、先月の9月23～24日、「第24回地域と世界がつながるフォーラム」を開催しました。これはフォーラムの実行委員会と東海市民社会ネットワークの共同開催となりますが、研究会の一環と位置付け、開催したところですが、三重県の名張で開催しました。名張市の市民の方たちも参加され、遠くは九州、関東からも参加があり、盛大に行われました。これが1年間に行われた大体の事業です。

「今後の予定と課題」と書いてありますが、ネットワークの政策提言の研究会を来年3月4日に開催しようということが決まっています。それから課題として挙げられる、あるいはこれから手を付けなければいけないところですが、ユースの活動支援と参加促進という部分がまだ少し遅れているのかなということで、これからやるところです。それから、SDGsの地域展開を図る市民活動のプラットフォームの形成も必要ではないかということも議論しているところです。SDGsに関しては、JICAさんもさまざまな取り組みをされていますので、これから何かの形で一緒にさせていただき協働の機会もあろうかと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思っております。以上が、東海市民社会ネットワークの活動についての報告です。ありがとうございました。

多田：西井理事長、ありがとうございました。それでは、3項目目に移りたいと思っております。3項目目は「NGO連携調査団」で、イギリスに出張いただいた名古屋NGOセンターの戸村事務局長にご報告をお願いしたいと思います。

戸村：お手元に、少し遅れてホチキス留め以外の2枚ものを出させていただきます。「英国NGO連携調査団」ということで、JICAさんよりJANIC（国際協力NGOセンター、ジャニック）のほうに依頼があつて、そこから全国のネットワークNGOに参加を呼び掛ける形でお話を受けました。昨年度、3月19～24日という年度末の押し迫った時期で、なかなか人選を考えるゆとりがなく調整が難しいということで、私が行くことになってしまいました。果たして人選が良かったのかといまだに思っているところですが、私なりに行かせていただいて感じたところ、見てきたことをお話しさせていただきます。

これは、JICAの国内事業部市民参加推進課の課長の諸永さんを団長にして、JANICの副理事長でプラン・インターナショナル・ジャパンの鶴見さん、関西NGO協議会の代表理事の柏木さん、JANICの理事でJEN（ジェン）の濱坂さん、多分当時です。さらに、JANICの調査提言グループの小泉さん、JICAの市民参加推進課の榎さんと私という7名で参りま

した。「Bond」はBritish Overseas NGOs for Developmentの省略で、イギリスで最大のネットワークNGOです。参加団体は450団体を超え、50以上の自主グループがテーマごとにいろいろワーキンググループを行うなど、先端的な活動をやっているBondの年次総会…

杉本：資料はないのですね。

戸村：そうです。報告書は一応出ているのですが、これは内部資料ということです。報告書はNGOセンターなり、JICAさんの中で見ることができますので、このもの自体は出しておりません。

戸村：今日は後でこれを。すみません。どういう形で何をしに行ったのかを先に簡単にお話しすると、Bondの「Annual conference and exhibition 2017」という会議に参加したのですが、この規模は参加者が1,000名を超え、NGO・政府機関・民間企業・財団等の参加者がいらっしやいました。全体のセッションがあったり、それから6つのカテゴリー、「実施」「ひらめき」「投資」「革新」「影響」「インパクト」という6つのカテゴリーで27の分科会があり、そこに分かれて議論に参加しました。セッションの他にも展示会というか、ブース出展も規模がとても大きく、企業さんや政府機関などいろいろ出ていました。また、参加者が分科会の間やランチタイムなどにネットワークをつくるための場も提供されており、とてもにぎやかというか、熱気のこもった会議でした。

この目的ですが、イギリスの国際協力分野のネットワークNGO等の取り組みから学んで、日本における「中間支援組織／ネットワークNGOの果たすべき役割及び今後の方向性」、さらに「JICAと日本の中間支援組織／ネットワークNGOの連携のありかた」を検討する。

調査のテーマとしては、1番目に「SDGs達成に向けた中間支援組織／ネットワークNGOの役割」、2番目に「国内課題とグローバル・イシューへの取り組み」、3番目に「中間支援組織／ネットワークNGOの運営方法と政府機関（公的機関）の関係性」、4番目に「市民へのアウトリーチ PR／ファンドレイジング」、5番目に「市民社会のスペース」を掲げて、それぞれ見てきたこと、聞いたこと、考えたことをこの報告書にまとめてあります。それをさらに分かりやすく、その報告書の中からポイントを挙げて表にまとめたものが皆さんにお配りしてあるものです。細かく見ていくと時間がなくなってしまうので、この表についてはまた見ていただきたいと思います。

先ほど言いましたように、Bondは大きなネットワークNGOなのですが、さらに幾つかのネットワークNGOに加盟している形で、ネットワークがとても裾野広く張り巡らされており、お互いにいろいろと協働しながら、さらにイギリスの国際開発省・DFID（Department for International Development）といろいろ連携しながら活動を行っています。細かくお話しする時間がないのですが、先ほどの2枚とじのものは、日本で私たちが何ができるかという取り組みの案として出したものです。左側のテーマについて、ネットワークNGOとしてこれからどういう取り組みをしていくのか、していかなければならないのかというのが真ん中の行で、右側がJICAとネットワークNGOの連携強化に向けた取り組みとしてどういう

可能性があるかです。それぞれが出したものをこういう形で整理してあります。今日は細かくお話しする時間がなく、もう予定の時刻、10分が経ってしまいました。消化不良で申し訳ないのですけれども、またおいおいご質問なりありましたら、できる範囲で説明させていただこうとは思っています。報告書はJICAさんのほうはもちろんおありでしょうし、NGO側もNGOセンターに問い合わせいただければ、お渡しすることができます。こんなところで申し訳ありませんが、よろしいでしょうか。

多田：ありがとうございます。事務局長、1点ちょっとお尋ねしたいのですが、実現可能生のところに星1つと星2つがあるのは、これは多いほうがしやすい、実現可能性が高い、そういう理解でよろしいですか。

戸村：そうですね。下のほうに注意がありますが、これはすぐにでも取り掛かっていけるのではないかというような内容になっています。

多田：はい、分かりました。すみません、ありがとうございます。

戸村：これはすぐにではなく、中期的な観点も含んだものです。

多田：分かりました。ありがとうございます。ご質問、コメント等はございますか。はい、どうぞ。

河合：このネットワークNGOの役割というのは、名古屋NGOセンターに求められている役割なのか、それとも全国としてネットワーク化していこうと思っていることなのか、それはどちらなのでしょう。

戸村：先ほど西井理事長からの話にもありましたけれども、名古屋NGOセンター自体も仕事を見直して固め、これからどういう役割で活動するかを現在話し合っているのです、私も報告書に書くときに戸惑いもあったのですが、全国どこのNGOも大なり小なり共通した悩みがあって、それ全体を見通しながら、こういう問題が挙げられるのではないかということを出しました。

多田：ありがとうございます。よろしいでしょうか。それでは、もしありましたら、また後ほど伺います。次の項目に参りたいと思います。次は、今年開催した『協働のハンドブック』におけるワークショップ、こちらについての報告を名古屋NGOセンターの龍田理事にお願いしたいと思います。龍田さん、よろしくお願ひします。

龍田：パワーポイントでお願いします。こんばんは、よろしくお願ひします。NGOセンターの龍田です。5月18日、前回の地域協議会の後、このJICA中部で『協働のハンドブック』に係るワークショッププログラムということで、実に中部のNGO関係者18名とJICA中部の9名の方に参加していただいて、非常ににぎやかにワークショップを開催しました。前回のワークショップを、先ほど見ましたら11年12月末と2月に行っており、それからすると実に5年ぶりに開催することができました。

実際にもう少し詳しく、参加者はこのような形で、NGOセンター関係者も多いのですが、地域のNGOとJICA中部の方で、次長さんをはじめ関係の課長さん、担当者の方に参加していただいて、しっかり話し合うことができました。全体の流れはこのようになっています。

自己紹介に始まり、ハンドブックのことについて少し私から経緯を説明させていただき、両方から連携、協働事例についてご報告させていただいて、その後、ワークショップを2つ展開しました。

最初は「協働の意味とメリットについて」で、協働するとどういう良いことがあるのかについて話し合いました。ワークショップは、Aグループから4グループという形で、先ほどのここにあるように皆さんバラバラに入っていて、大体4～5名、5～6名のグループになって話していただいた形になっています。1つ目が「協働の意味とメリット」で、その後あまり時間がありませんでしたが、「協働を進めるために必要なこと」ということで話し合いをさせていただきました。

まず「協働の意味とメリットについて」、いろいろな意見が出てきましたので、それをご紹介したいと思います。これはBチームですが、NGO側のメリットとして考えられること、それからJICA側のメリットとして考えられること、双方のメリットとして考えられることがいろいろ報告されています。例えば、NGO側からすると「信用が得られる」「評価が上がる」「地域のリソースの紹介やつなぎをしてもらえる可能性がある」とか、「他分野連携の紹介」「中小企業と中小NGOのマッチング」、例えば「BOPビジネス等ができる」「相手国とつないでもらえる」など、さまざまです。あとは「JICAの専門家や専門技術のアドバイスが頂ける」とか、そういったものが得られています。

JICA側のメリットからすると、やはり発展途上国というか、現場というか、「住民サイドに声が届く」。逆にNGOのネットワーク、隣国というか、あちら側でもNGOのネットワークがあるので、そういったものが活用できるとか、「NGOの専門性」。それから、JICAが入れない地域、JICAの事務所がないところも含めて、僕の経験だとスクワッターエリアというか、厳しいスラムエリアとか、そういうところだとJICAさんだけだとなかなか入りづらいけれども、NGOが例えば協力隊の方を受け入れたり、いろいろ協力していただいたりしていることもあります。あと、「相互に学び合うことができる」ということがいわれています。

他のグループでは、大体同じですが、「ネットワーク拡大」「資金」、要はお金を大きく規模を拡大とか、エリアで「点を面にできる」といった効果です。「大きいサイトでやれる」、もう一つは割と小さい事業地をずっと見ているだけではなくて少し視点を広げ「広い視野で見ることができる」「ボランティア育成も集まりやすい」などです。あと「現地レベルでの受け入れ」、そういうのもあるという話です。大体、先ほどと同じようなことです。

もう一つ、Cグループということで、大体かぶっているのですが、少しずつ違っているところがあって、少し多様な形にはなっています。特にここでは「安全・安心に動ける」。安全・安心のためのガイドラインに基づいていろいろ整備することもあるし、危険情報について現地のJICA事務所から教えてもらえることもあると思います。あとは「資金のメリット」、大体同じようなことですね。JICA側のメリットでは、やはり「現地の住民の人に

寄り添える」など、そういったことが出ています。ということで、見ていただくとあれですが、これは1人が話しているわけではなく、色が違うのは多分人も違っていき筆跡も違うので、多くの方がざっくばらんにいろいろな意見を言って、それをまとめてあります。

なぜ協働するか、メリットは、皆さんわりと言いやすいのですけれども、それに比べるとなかなか難しいのが「協働を進めるために必要なこと」です。この辺が分かるのは、実際にNGOに必要なこと。要は、協働するに当たってNGOがもう少し理解しなくてはならないこともある。例えば、能力はもう少し向上を要する。特に団体運営面や経理、そういったところかもしれません。あと、この辺がちょっと難しいのか、やれているところとやれていないところがあるのかもしれませんが、「率直に議論ができる」。率直には、報告もありますし、おかしいと思うことはちゃんと言い合えるような関係がつかれるのかもあります。逆に、契約で決められていることはしっかりやらなくてはいけないので、それはどこがやらなくてはいけないことなのかもちんと押さえていなければいけないし、やはり公金を使っているのでJICAには説明責任があるなど、こういうところはきちんと守らなくてはならない、こういうことはしっかり理解しなければいけないとJICA側は思っているし、NGOとしてもある一定の理解はしていけないところだとされています。

JICA側に必要なことは、割とNGOから声を掛けにくいところがあるというか、後で出てきますけれども「JICAは敷居が高い」というのがあり、なかなかJICAの人に言うことが難しい。「なかなか言わずにこらえてしまうところもあるので、そういったことを少し考えていただきたい」「譲れない点もあるかもしれないけれども、使いやすくなるように制度改善を働き掛けてください」というようなこともあります。あと「柔軟性を持てるところは持ってほしい」「NGO側の知見・経験に一定の敬意というか、評価をしてください」。これは両方ですが「一緒にやっていく精神をどう持つか協働ではとても必要になってくる」というようなことがいわれています。

他のチームではいろいろあるのですが、「NGOがJICAは敷居が高いと思っているのではないか」という話も出ていますし、「協力隊員は親しみやすいのだけれども、JICAは」とか書いてあるのですが、その辺のコミュニケーションをどうつなげていくのかということにも触れられています。この辺は後で多田さんのほうから少しフォローしていただけるかもしれません。

もう一つ、別のグループですけれども、この辺は面白いのですが、要するに共通の目的のために、受益者というか裨益者が求めているものかどうかという、この裨益者視点がすごく重要だろうと。このために、JICAもNGOもどうできるかのようなところを、やはり草の根では重要視したほうがいいのではないかと。やりやすい事業をしたり、いろいろNGOサイドでもあるかもしれません。やりたい事業・やりやすい事業があるかもしれませんが、それが本当に求められているものなのか、それをやることでソーシャルインパクトが一番大きくなるのかというのは、やはり振り返る必要があると議論されていました。

4つのグループに分かれたのと、みんな意見を取りあえず何でも言ってくれという状況だったのでかなり言いやすく、2つのテーマについて屈託のない意見交換ができました。それから、先ほど申し上げたように壁を乗り越える、つまりNGOも変わっていくとか、JICAとの関係をどうしていくとか、乗り越えるためにはより上位の、要するにJICAとNGOが顔の見える人間関係をつくと同時に、裨益者のニーズに応えるという本来の、そのものの目標をきちんと確認しつつ、そのための事業を行っていくのが乗り越える一つのポイントであるということもいわれています。以上、ざっとした報告ですが、かなりしっかりした時間を持つことができました。皆さま、ご協力をどうもありがとうございます。以上です。

多田：どうもありがとうございました。ご質問、コメント等はございますか。

杉本：一つだけちょっと。別にコメントというほどでもないのですが、これ2回やって、私は1回目も出たのですが、多分に共通していることがありますね。それをどうやって解決していくのかというようなことが必要だと思う。1回目も出て、2回目も出て、敷居が高いとか上から目線であるとか、そういうのは1回目も出ていて、それをどうやったらいいのかみたいなのところにしていかないと、終わってしまう。というのを今ちょっと思いました。3回目はむしろ前はこういうことがあったから、これをどうやったら解決できるのかみたいになると、すごくいいなと思います。

龍田：ワークショップをすると割といろいろな意見が出てくるのですが、言い放しになってしまって、それをどう次に生かせるかが抜けるところがありますので、その辺も……。

杉本：2回やるから。1回目は別にそうだと思うのですね。2回やって、同じことを3回やると、ちょっと……。

龍田：その辺については今後、JICAとNGOの間で。

杉本：私も今見ていて、2回目見たから、かえてそういう感じがしました。

龍田：要は、5年前と同じことを言っているなというところが、まだ結構あります。でも、それをまず確認したというところも多く、どうつなげていくかを今後またお話しさせていただければと思います。よろしくお願いします。

杉本：ありがとうございます。

多田：それでは、最後の報告項目に入りたいと思います。「2017年度第2回NGO-JICA全国協議会」が先般開催され、名古屋NGOセンターの中島理事にご参加いただきました。その全国協議会のご報告を頂きたいと思います。

中島：では、資料2を見ていただきます。これは年4回開催されるNGOとJICA協議会全国版で、（今、皆さんが出席されているのは中部版で中部の地域協議会もできましたが、）年4回の定期協議会の2回目です。大体年4回のうちの第2回は地方開催となっています。それが北海道で初めて行われました。日程は10月16～17日で、名古屋からは私と龍田理事が出席しました。

目的のところにありますけれども、北海道の事例で、「NGOと多様なアクターの連携促

進」について事例発表と意見交換、そして日程を見ていただくと分かりますが、10月17日の午後に北海道滝川市における、主にJICA研修事業の受け入れを滝川市の行政が中心になって地域のリソースを活用して展開されている事例について、この会議の中で説明がありました。それから、もう一つが「2017年度NGO-JICA協議会年間テーマ中間報告」で、これは資料の最後になりますが、1枚ものの資料3-2で、最後のページに付いています。そこに今年の定期協議会の年間テーマがあります。大きく分けて2つあり、一つは「草の根技術協力事業の案件の質の向上と裾野拡大に向けて」、もう一つは「地方創生／地域活性化に向けた連携について」です。

私は協議会のコーディネーターの1人となっていますが、そこで与えられたお題は「地方創生／地域活性化に向けた連携について」の中の2番目、「ネットワークNGOの活用促進を通じた地域におけるNGO、JICAの協働体制について」です。こちらは後で協議題にも挙がっています。今回、このテーマに関しては2日目に、元の資料に戻っていただき、2日目の朝9～11時、スケジュールにあります、「ネットワークNGOとJICAの意見交換会」を午前中に持ちました。もう一つ、3番目の課題が、その他の課題として「環境社会配慮ガイドラインのレビュー調査法に関して」がありました。先ほど「ネットワークNGO-JICAの意見交換会」を述べましたので、その4つの目的で2日間の日程で、北海道で展開されました。スケジュールを見ていただくと分かりますように、NGO側の打ち合わせの時間があり、協議会を準備した上でJICAの方にも入っていただいて、東京から来られた方、北海道のJICAの方も含めて、さらにテレビ会議で世界のJICAの方を結んで、100名以上の参加がありました。

2日目の13～15時半は滝川市において、多様な方との連携促進の事例で、アクターの人々を小グループで囲んで、JICA側・NGO側が連携の秘訣についてアクターから学ぶ時間が1時間半持たれました。次のページをささっと見ますと、私の簡単な紹介が書いてありますが、一番目ですね、NGO側の準備の時間の中で「地域ネットワークNGO間での連携について」がJANICから提案されました。これは先ほど戸村事務局長から報告があった「英国NGO連携調査」に基づいてということで、全国の地域型ネットワークNGOを連携して組織化することが今計画されています。地域のネットワークNGOが1つに連携することによって、さらに政策提言力を増して、市民社会を取り巻く環境が改善されることを目指しています。

それから2番目、2日目に行われた「JICAと地域ネットワークNGOの連携について」ですが、一つは私がそこで感じたことも書いています。段落の上のところに書いてありますが、「JICAにとっては協働のアクターが多様化し、NGOの相対的位置がJICAの中で低下しており、かつ地方のJICAはマンパワーが削られていると思います。双方に余裕がない中、さらに効率化が問われているようなプレッシャーがあります。NGO側としては、外部の脅威として、市民社会の狭窄化という大きな脅威に晒されている状況があつて、そこにおいて私というか、NGO側の意見として、効率化のみならず、ネットワークNGOを含む

NGOや市民社会の環境をより良いものにも協働していただければ、また市民の国際協力への参加も高まるのではないかと思います」という今回の振り返りの意見を書いています。

それから、「JICAのネットワークNGOへの期待」「SDGsの取り組み強化とその拡大」ということ。ネットワークNGOへの期待がJICAさんからあるのですが、その中で例えば中部のネットワークNGOである名古屋NGOセンターは地域の中にあるNPOを全部網羅しているわけではないので、JICAが期待しているような多様な方を巻き込んでのSDGs達成のための働きについてはちょっと期待が過大であると。そのためには、やはり強固な名古屋NGOセンターの組織が必要で、人的・財的投入も必要かと思うということで、なかなか一筋縄ではこの期待には応えられないのではないかと思います。

あと、滝川市の視察に関しては、山内さんという行政マンの方が、行政の他の課や地域の機関、人々を巻き込む力がすごい方がキーパーソンとして、ほとんどいろいろなものを動かしているという感じを受けました。また、次世代の中学生や高校生たちをスタディーツアーに送り、その人たちが大学生になっても東京で働いても帰ってくるというようなイベントを打って地域を活性化しようとしていること、その中にある意味、持続性のある地域活性化というのを見ることができたかなと思いました。以上です。

多田：ありがとうございました。コメント、ご質問等はございますか。

阪倉：もし一緒に行かれた龍田さんなど、ご意見などありましたら。

龍田：JICAの事業をどう活用するか、滝川市のすごいところが2つあって、JICAだけではないのです。JICA、環境省、いろいろな活用できるものを活用しつつ、自分たちの周りにいる資源をどれだけ活用するか。要するに、普通の農家の人をどう活用するか。“国際協力人”のような人を活用するのではなく、そこにいる人を活用していく。これは以前、「ムラのミライ」が「ソムニード」といわれていたとき、高山の人で測量できる人が測量に行き、どう木を植えていくかとか、密度をどうするかというときに必要な技術として、要するに国際協力用の技術だけではなく、その地域に眠っている普通の方をどう活用していくか。そこを活用するだけではなく、その方にどうそこに意味を見いだしてもらうか。生きがいという言い方もありますが、それだけではなくて、自分の技術がどれだけ影響を与えることができるのかをその人自身に感じてもらう、周りの人にも理解してもらうのが、滝川市の人々を元気にしつつ、JICAやいろいろなプログラムをきちんと使いつつ、発展途上国・相手先も元気にすることかなというのが、割とよく分かりました。財政的には苦しいとおっしゃっていましたが、その中で皆さん頑張ってみえるのが分かって良かったと思いました。ありがとうございます。

多田：どうもありがとうございました。それでは、残念ですが時間となりましたので、ちょっと休憩を入れさせていただいて、第2部に参りたいと思います。

多田：このセクションにつきましては、名古屋NGOセンターの中島理事によりしく願います。

中島：それでは、8時25分までよろしくお願い致します。ここでのテーマが、先ほどありましたNGO-JICA協議会の年間テーマの2番目の「地方創生／地域活性化に向けた連携について」、特にその中の2番目「ネットワークNGOの活用促進を通じた地域におけるNGO、JICAの協働体制」です。NGO団体から見たネットワークNGOである名古屋NGOセンターへの期待・可能性などを踏まえて、ネットワークNGOを核とした地域でのNGO、JICAの協働体制を検討するのが、今年度第3回、12月14日に東京である協議会の中心のテーマとなっています。第2回は、先ほど報告したように、全国のネットワークNGOとJICAの話し合いというか、最初の意見交換会が行われました。今回は特にNGO加盟団体である皆さんに来ていただいていますので、ぜひNGOとJICAのテーマ、協働における名古屋NGOセンターに求められる役割について忌憚のないご意見を頂きたいのですけれども、今回、この協議の中においては、主に加盟団体とNGOセンターのやりとりとなります。最後に、JICAさんからも名古屋NGOセンターへの期待、可能性についてご意見を頂ければと思います。

今からお見せするスライドは、皆さん加盟団体の方に答えていただいたアンケートに関するものになります。直接、JICAとNGOの協働に関する質問項目はなかったのですが、実際、加盟団体の現状を把握している、表しているアンケートだったので、そこから間接的に各加盟団体がどういう課題を持っていて、その加盟団体をネットワークする名古屋NGOセンターへの期待や課題などもここから見えてくるということで、今回、この分析の結果を皆さんと共有したいと思います。

アンケート調査の目的は、そこにもあるように名古屋NGOセンターの活動が広範に及び、人材が大変不足し、組織の存続が危ぶまれている。この状況に対処するため、中長期的視点で事業を絞り込むために行われました。現在、正会員の加盟団体は49団体あるのですが、そのうち10月中旬の1回目の締め切りで集まった32団体の回答を分析しています。質問項目・選択肢は、ここに挙げてあるようなものになっています。「貴団体の困り事について1～8までの選択肢に優先順位の番号をご記入ください」ということで、1.資金の調達、2.会員の獲得・継続、3.情報収集・発信、4.有給スタッフ発掘・育成、5.ボランティア・インターン発掘・育成、6.組織運営、7.政策提言、8.その他で、優先順位を付けてもらいました。

加盟団体32団体の財政規模を見ていくと、3,000万円未満が25団体／78%、3,000万～1億円が5団体／16%、1～5億円が2団体／6%、計32団体。特に3,000万円未満の中身を見てみると、20団体が1,000万円未満、全体32団体の62%を占めているということで、この名古屋NGOセンター加盟団体が東京や関西に比べると小さいことが分かります。

それから、最初に8項目を上から、皆さんがアンケートの中で答えていただいた上位3つが何ポイントかとポイント付けしたところ、一番多かったのが「会員の獲得」で困っている。その次が「資金の調達」、それから「ボランティアやインターンの発掘・育成」「組

織の運営」「有給スタッフの発掘・育成」「情報の収集と発信」、そして「政策提言」が一番最後になりました。ここでいえることは、「有給スタッフの発掘・育成」が5番目で、「ボランティア・インターンの発掘・育成」のほうが上にきているということは、答えていただいた32団体の中でもフルタイムを擁している団体が少ないというか、皆さんボランティアで頑張っている団体が多かったのかなと思います。

皆さんが答えた中身を分析していくと、会員が増えないという中に「活動が中心になるので、新規の会員を育成する余裕がない」。会員の定着率が低い理由は「受益者に的確な活動報告ができていない」「会員の高齢化。退会が相次ぎ、一方で新たな人を獲得するのが大変難しい」という状況です。

それから「資金の調達」。会員が集まらなると、会員と寄付はつながっているので「寄付金の減少により活動予算が集まらない」。また、「助成金を申請してもなかなか獲得に至らない」ということは共通した大きな課題でした。

「ボランティア・インターンの発掘・育成」に関しては、「学生時代はボランティアとして本会の活動に協力してくれる学生は多いが、就職後は継続が困難となる場合が多い」ということがありました。

「組織運営」に関しては、「事務局の機能が脆弱である」「専従職員が2人と一部理事が事業、庶務、会計、ファンドレイジングしている状況。負担が集中している」。非常に、これも共通した課題かなと思われまます。

「有給スタッフの発掘・育成」に関しては、大きい団体も小さい団体も共に「人材の売り手市場状態にあって、スタッフを募集しても応募がなくて困っている」。小さい団体、大きい団体の共通した問題でした。

「情報の収集と発信」。「いろいろなイベント、勉強会などを開催しても、なかなか人が集まらない」。

最後ですが「政策提言」。「自身の活動範囲以外、他地域との情報共有が少なく、10年後の戦略が見えない限界がある」「同地域活動同士の交流で、政策・戦略を立案できる場が必要ではないか」「人材・知識の確保などの課題は能力強化で一部は改善できるものの、より根本的な構造的課題を解決しなければ状況はあまり変わらない」。もっと政策環境を良くしてNGOにお金が回ってくるような政策というか、税制も含めていろいろな大きな構造的な変化が必要ではないかということですか。「NPOに対する一般の認識を変えていく必要がある」、社会の啓発が必要であるということですか。

「NGOセンターへの期待」のところ特に注目したかったユニークな意見としては「組織内部の改革もさることながら、厳しい外部条件を緩和していかない限り、ボランティア組織は劣化していく危惧を持っています」。ただ、そのことに関して、期待に応えられない名古屋NGOセンターの現状、名古屋NGOセンターもまた組織を今見直すというような大変な状況になっているということがあります。支えていく中間支援組織でありながら、今自分たちをどうするかという厳しい状況があると思います。

「外部の脅威と機会」を見ていくと、「今の政治状況の中で市民社会スペースがどんどん狭められている」という外部的な脅威があり、併せて「日本社会が内向き」「国際協力離れがどんどん進んでいる」。われわれにとって「機会」としては、SDGsへの取り組みが裾野拡大の機会として期待できるのではないか。

そういうことも考えながら、ネットワークNGOとしての名古屋NGOセンターの役割に関して、NGOとJICA協働における役割は何なのか。期待と可能性について、地域の特性を生かした顔と顔が見える関係とか、多様なアクターとか、そしてNGOとJICA中部の良好な関係を生かすということで、皆さんのほうから何かご意見を頂ければと思っています。今日来られたNGOの方々はほぼ全員の方が見直しのアンケートに答えていただいていますけれども、JICAの協働に関する項目は見直しのアンケートの中にはなかったもので、この場でNGO、JICA協働における名古屋NGOセンターに対する期待・可能性について忌憚のないご意見を頂ければと思います。

杉本：ちょっと質問ですが、今最後に中島さんが言われたことをもう一回、JICAとの関係で何か発言をとということですか。

中島：加盟のNGOとJICAさんとの協働において、ネットワークNGOとしての名古屋NGOセンターに期待されている役割があるとすれば、どういうものがあるでしょうか。皆さんとJICAさんの協働において名古屋NGOセンターができること、という意味です。

杉本：ちょっと違うかもしれませんが、そういうことで言われると、もともとずっと昔の話だと、草の根技協とか、パートナー型もだいぶ前に、ODAがそれまでで一番になったというときに、それをどうしてNGOが使えないのかという話が全国NGO協議会で出て、当然ODA本体に対してもNGOはそういう能力もあるということで、むしろ外務省、JICAのほうに「それをやらせろ」という形で話をして、そのときに例えばコンサルと比べて条件が悪いとか、内容が厳しいとかいうこともありました。NGO側担当になった人も知っているのですが、担当になった人はかなり大きなNGOの人だったので「そんな安い給料では誰も働きませんよ」と、当時もかなり頑張った。頑張ったけれども、結局、そのときもコンサルと同じ値段にはならなかった。それが今も尾を引いているのですが、だから結局、本来的には、あの時人に言われたのは、外務省もそのときなぜNGOに注目したかという、昔の話ですが、いろいろな出来事があったときに、例えば農水族とか文教族とかいうのがある。今でもあります。そのとき、「外務省族ってない」と言われた。そうしたら、むしろNGOが一番外務省族に近いではないですかと。だったら、オールジャパンでいきましょうという話になったのですね。確かにそういうときに全体の収入は上向きだったので、どんどんやってみようという形で進んでいったのですが、実際は、私自身は東ティモールだったので、東ティモールで5年間やって現JICAの佐藤さんもよく知っているのですが、やはりどうしてもイコールパートナーシップにはなかなかできないということがあって、一つは賃金もかなりあるのではないかと考えています。コンサルも大変なのでコンサルより大変だとは言いませんが、ほとんど同じことをやっていてコンサルとなぜ違うのか。

だから、今、少し言いたかったことは、そういうことからすると、個々のNGOでこういうふうにしたというのを、例えば契約者にしても、さっき言った待遇にしても、あるいは現地の例えばビザを取ってくれるとか取ってくれないとかというようなことにしても、なかなか1 NGOでは言いにくい。言ってもなかなか話題というか、どこに言いにいけばいいのか、「所長さんに言えばいいの？」という話になってくる。そういう意味では、確かにNGO-JICA定期協議会がNGO-外務省定期協議会から3年ぐらい遅れて始まったのも意味があって、実際にやる部分で言っていないと、外務省にいくら言っても変わらない。やはりJICAとの話も必要だと思う。そういう意味では、それなりに。もちろん、成果がどれだけ上がったかはその時々で変わるとしても、今まで続いてきたこと自体に両方ともニーズはあって、NGOだけが勝手にニーズで動いたわけではなくて、外務省ともJICAともずっと続いてきて、たくさんの人に出ていただきました。例えばJICA協議会だと、開発教育は最初の5年間ぐらいはほとんどNGOが、一緒といっても、NGO側がほとんど例を出してやっていったのです。

そういうこともあるので、そういう意味では、協議会などにしていくのは社会に根付かせるといった意味では非常に意味があったし、今でもやめようという声が出ないということは、こういうこと自体にそれなりにニーズはあるのだと思います。だから、声を大にして、お金うんぬん、NGOセンターがどうのこうの、個別のNGOセンターとかそういう話ではなくて、全体にそれはやはり必要だったと思いますし、今でもそういう意味では必要です。逆に言うと、今回のように率直に「こんなに困っているんですよ」というのは多分初めて出したので、「そんなに困っているの？」というのものもあるかもしれませんが、そのような話ができることから、やはり「では、どうしましょうか。NGOはなくてもいいですか」という話になったときに、JICAは「なくてもいいですよ」と言えるのかというところは、NGOとすると、そうならないようなNGOにならないといけないから、考えるところもあるけれども、そういう意味では実際にもお互いの関係は大事なことがあると思います。今、思い付いたのはそのことです。

河合：「泉京・垂井」の河合です。このアンケートに私たちの団体も答えさせていただいて、やはり資金不足や人材不足を一番に挙げるのですが、それは今、目の前にある困っていることです。実はこういう協議会があったり、ネットワーク組織をずっと続けてきてもらっているおかげで、例えば、私が初めて「泉京・垂井」に関わったとき、「TPPの問題をみんなで考えましょう」と言ったときに、自分たちの団体ではできることは少ないし、アンケートに見るように1,000万円以下の規模の団体が多くを占めている中で、小さい団体ではなかなかできないことが、ネットワーク組織である名古屋NGOセンターがあるおかげで政策提言ができるし、僕のような小さな団体がこういう場に来られる、そういうことがあると思います。困っていることを解決していただくのも確かに大事なのですが、今までやってきたネットワーク組織である強みを今までどおりにやっていただくとか、もっと伸ばしていただくほうも考えていただくと非常にありがたいなと思います。資金調達

に関しては、もしかしたらネットワーク組織ではない他のところで何かヒントが得られるのかもしれませんが。アンケートは目の前の危機がどんどん出てきてしまうものなのですが、やはり普段あってありがたいものも育てていてもらいたいと思います。

あと、SDGsなどを考えると、それぞれの団体にそれぞれの強味があり、例えば貧困をなくすことに強みがある団体でも、実はジェンダーの問題だったり水の問題だったり、いろいろな問題があり、課題というのはその組織ではなかなか解決できないような問題も絡めながらあると思うし、こういうネットワーク組織があってSDGsに当てはめていくとそれぞれの強みのようなものがきつとあると思うので、そういうところも見える化して、「この団体はこういうところが強いよ」というように、一緒にやっていくのも一つの手かなと思いました。

丹羽：：アジア車いす交流センター・WAFCAの丹羽と申します。よろしくお願いいたします。ここの「外部の脅威と機会」に「日本社会の内向き」「国際協力離れ」とあるのですが、僕はこれを非常に痛感しています。僕自身はJOCVの出身なのですが、JOCVにいた仲間同士でも、やはりこうした「国際協力に興味・関心を持っている人、周りの友達にいます？」というような話をすると、なかなか話が合わなくて困るというような、そういったことを感じています。今、JOCVでも非常に応募者数が減っているということは、ある意味、こういう日本社会が内向き、国際協力離れが非常に深刻化していることが一つあるのではないかなと思っています。

この4月から現職でNGOのスタッフをやっていますが、例えば新規の会員の方を獲得するためにいろいろな大学でいろいろなお話をさせていただいている中で、就職活動に1、2年生の頃から気が向いていて、こういった市民活動に関する興味・関心が薄れているのは切に感じます。僕自身、こうした国際協力にどういった経緯で興味・関心を持ったかといえば、非常にささいなことだったので、NGOセンターを含め、われわれ加盟団体、そしてJICAさんの三者で、またもっと多くの関係者を巻き込んででも、学生とか新しい人材を育てるためのユニークな企画を打ち出すというのは一つ手ではないかなと考えます。

今回、ささしまグローバルフェスタでしたか、何かそうした、Zepp名古屋さんを使われてファッションショーのようなものをJICA中部さんがやられたと思うのですが、ああいったものは今どきの学生さんには非常にキャッチーで、「JICAって何だろう」ということを知ってもらう機会だったり、「国際協力って、どんなことをやってるんだろう」「NGO・NPOって何？」という一つのきっかけになると思うので、そういったきっかけをわれわれがいろいろな形で協働して提案していくのは一つありではないかと思います。以上です。

中島：ありがとうございます。

高坂：JICA側もコメントしていいですか。

中島：はい、どうぞ。

高坂：今ご意見を頂いた「アジア車いす交流センター」の丹羽さんのご指摘事項について、全くそのとおりだと思います。名古屋NGOセンターとJICA中部では長年にわたって「国際

協力カレッジ」という事業を実施しており、今年度も12月2日に実施予定なのですが、まさに大学生を中心とした国際協力を志す人に対していろいろなキャリアパスを提示して、NGOの方にも多数参加していただいて、国際協力のキャリア形成、NGOで働くという選択肢を提示するというイベントを実施していることを付け加えさせていただきます。

中島：ありがとうございます。皆さんアンケートに答えられているので、せっかくですので、一言ずつ各団体に言っていただくということで、どうでしょうか。

伊藤：「ニカラグアの会」の伊藤です。私はJICAさんとNGOセンターの協働という面も考えないわけではないのですが、今、名古屋NGOセンターのことを考えると、ネットワークを何というか、もっと多様というか多層というか、地域的にも中部は中部でいいのですが、もっと広くというか農村部というか、もう少し広いところまで、NGO団体に限らなくてもいいと思うのですが、そこにかかっている、そこから何か持ってくるということをやらないと、多分、今のいろいろな状況を見ていると難しいのかなと。どんどん狭くなるのは、ある意味では仕方がない面があると思います。ですから、そこをJICAさんも含めて、NGOセンターはいろいろなところと協働していくことをやるといいかなと。私は、ニカラグアの会の活動だけではなくて、今違う活動もやっているの、そこから見ると、そういうのが必要かなと思います。

中島：ありがとうございます。まだ発言されていない方、お願いします。

中島（正）：アムネスティという団体は非常に大きな団体なのですが、私たちは名古屋で7人のメンバーでやっている小さなグループなので、先ほどの財政規模は非常に返答に困りました。私は1年半ぐらいですか、政策提言委員会に参加してから外務省やJICAとの協議会で具体的な話などを多く聞いたりして、個人として非常に危機感を持っています。

ちょうどアムネスティという団体が、つい最近ですが、今まであまり国内にはいなかった、いわゆる良心の囚人、思想信条が故に捕われているという問題で、沖縄・辺野古の山城さんという人の救援を国際的に呼び掛ける活動を行いました。僕も30年近くアムネスティのメンバーなのですが、日本社会の深刻な内向きというか、われわれは海外のいろいろな人権問題を支援する目的だったのが、足元の日本社会の人権問題が深刻な危機にあります。もう一つ象徴的なのがいわゆる共謀罪法案で、アムネスティは国内の問題に関しては正面切ってコミットしてこなかったのですけれども、共同で記者会見を開いたりしています。

本当にここ最近、僕も海外の人権問題に関心があったのですが、この最後の「脅威」というところ、市民社会スペースが狭められているとか、日本社会が内向きであるとかですね。例えば、栄でわれわれグループの例会を持っているのですが、何カ月か前、栄のど真ん中でいわゆるヘイトスピーチをしている団体がいて、そういうことが日常化していますよね。東京でも大阪でも本当にひどいヘイト発言をする団体が大量の警察官に守られながら堂々とやっているような状況を、今日この場にはそぐわないかもしれませんが、JICAや外務省の方々と、国際的な視点で考えた日本社会の内向きな変化とか、そういう問題をも

う少し率直にこういう場で意見交換しながら、僕も青年海外協力隊に関心があった時代もあるのですが、やはり一緒に歩んでいきたいと思っているのですね。JICAでいうとトップの方、安倍政権と親しい方が今、続いているのですか？ 木山さんでしたか、トップですか？ ああいう問題なども僕は本当に日本社会の深刻な危機だと思っていて、そういうことを多分JICAや外務省の仕事に夢を持って入った方の中に、文科省の前川さんという存在を知って非常に心強かったのですが、きっといると信じて、やはりNGOの側と一緒に手をつないでいける人をもっと探したいなということを今日、発言しようかと思いました。以上です。

中島：八木さん、いかがでしょうか。

八木：「ペシャワール会」本体のほうはJICAさんと協働で事業をやっていて本当にお世話になっていますし、それに合わせてペシャワール会もいろいろ組織変革などを今行っている途中で、全体の話としてはそういうことがあります。それは本部の話ですが、この地域でとなると、僕らの団体としては冒頭に言いましたように、講演会などをやる時に宣伝していただく、後援をしていただく、あとは会場を貸していただくとか、そういうことになります。協働で事業ということは、資金的なこともこの地域ではやっていないので、ここで特に協働に関してというお話はちょっとできません。

ただ、ペシャワール会の活動もそうですが、やはり興味を持って集まってくれる人が、特に若い人が少ないという状況があります。ペシャワール会に関していうと、いわゆるテロ事件があって戦争があって、その中でどういうふうに国際協力を進めるのかということで集まってくれた人はいるのですが、最近いろいろなところで話をしてみると、もはや9・11のテロのことを知っている若い人があまりいないようなという状況の中で、「じゃあ、何でやるんだ？」ということの説明がなかなか……。前は直接集まってきてくれたのですが、そういうのができなくなってきました。

それプラス、今言われたように活動そのものが、NGOだけに限らず、市民活動そのものが十分展開できていかないと、海外協力などにも目が向いていかない。僕の経験からいうと、アフガニスタンだけに興味があったわけではなくて、社会全体に興味があった中でアフガニスタンのことや日本のこと、そういうことに興味が行くということがあったので、やはりそういった全体の市民活動が展開されていく中でNGOも活発化していくということがあると思います。特に僕などの世代からいうと、国際協力に対する興味はそれだけを取り出した問題ではなくて、やはり全体を見る。何を問題にするか、どういう社会を目指していくかを考えていく中に国際協力もあるということです。「皆さん、アフガニスタンのことを教えてください」と言っても、「えーっ」ということにはなるかもしれないけれども、それに自分が関わるというか、社会活動として関わるとなると、やはりそういう人が少なくなっているのかなと。それは、先ほどから言われている市民社会活動のスペースが抑えられているというか、そういう意識です。学生さんは、僕の子どももそうですけれども、昔は何を勉強するかだったのですが、今は就職率がどれだけいいかのというよう

な話で、社会に目を向けていく状況がなかなかできていません。保守化という若い人たちは怒るらしいのですが、僕から見るとそういう状況があるような気がします。

そういうところを、やはりNGOとしては見ていかなければならないし、個々の団体ではそれはなかなかやりにくいことなので、いわゆるNGOの、中間支援というのではなくて、ネットワーク化したNGOの役割はちょっと別にあるのかなという気がしています。また、JICAさんとしても事業としてやっていくのは難しいかもしれませんが、社会に対する目を若い人に開いてもらうというところが重要なと僕は今思います。

中島：どちらかというと、JICAさんに対する協働、期待ということでしょうか。では、チェルノブイリを担当している戸村さん、お願いします。

戸村：チェルノブイリというより、今、名古屋NGOセンターの未来をどうしていくかで頭がいっぱいなので、そんな感じでお話しします。よその団体さんというか、NICさんなのですが、若い人を対象にしたアワードをやっていたら、そこに少し関わらせてもらったら、若い人がたくさん、何らかの国際協力、または国際交流かもしれないのですが、そういう興味・関心を持って活動をしているグループ、団体が実際はたくさんあります。その先へ、どういうふうに関係の世界へ、さらに継続して活動してもらうかという工夫をNGO側もやらなければいけないし、大学もきっとそういうことを考えていると思います。

「これは、NGOの問題ではないか」とJICAの皆さんは思われると思うのですが、開発協力大綱ですか、それからいろいろなセクターと裾野を広げて協力し合っていくと打ち出されているので、NGOの悩みと外から冷たく眺めるのではなく、同じ国際協力に携わる立場として「ああ、日本にはこういう悩みがあるのか」と。実際、この「内向き」というのはイギリスに行ったときに出てきた話で、ブリグジット、EU離脱でイギリスも国際協力より国内課題に目が向いているとか、アメリカも現大統領の影響で随分と資金が減らされているとか、それはもう日本だけではない国際的な問題であると思います。

そういう中で、最近、佐藤さんにも随分協力していただきながら、地域提案型の研修を先日、10月28日の土曜日に1日かけて行いました。このときは加盟団体ばかりではなく、いろいろな団体さん12~13団体が集まってきて、自分たちにどのような課題があるのかグループワークで真剣に考えました。すると、横のつながりで共通のものがあったり、そこはそういう悩みがあるのだということもお互いを知ることができます。そういう横の連携をもっと持って、お互いを高め合っていないといけないなど。これは、イギリスのBondで会員同士が自主的にいろいろなテーマについて活動しているということも学んだ上で思うのですが、そういうやり方も私たちはもっと考えていかないといけないと思っています。

JICAさんにも「何が問題なの？」と興味・関心を持っていただきながら、一緒に悩んでいたたり、アドバイスをもらったり、イギリスのDFIDのようにNGOにもっと資金を考えていただくとか、そういうふうに関係の一体となって取り組まないと、今の貧困や紛争、戦争、気候温暖化もそうですが、片が付かないなど、私はいろいろと混沌として考えているところです。ぜひ一緒にやれるところで、お互いに同じ世界・社会を良くしていくとい

う方向で連携していければと思っています。その際には、やはり皆さんが懸念されるような問題もあるので、そこは本当にパートナーシップに基づいて対等にやれるようにと願っているところです。あれこれと織り交ぜて話をしてみました。

中島：ありがとうございます。これを受けて、龍田さんと最後に西井さんに一言ずつお願いします。

龍田：前の『協働のハンドブック』やワークショップから5年経ちました。この5年ものすごい勢いで動いていて、あるいは顕著化してきています。みんなが幻想的に日本はまだ先進国で経済大国だと思っていたところから、かなりいろいろな意味で苦しい状況が目の前にあり、日本人もとても厳しいことを理解しつつあります。若い人がまだ内向きなのはいいほうかもしれないですね。若い人が「こんな危ない国は」と思い始めたら、もっと大変かもしれません。

なので、若い人も含めて、どう日本の人を生かしていくかといった切り口をもう持つ時期だと思います。日本にいる人が幸せ、幸せというか、海外で活躍して幸せというのも含めてなのですが、どうしていくか。プレーヤーがもっと一般の人の何かを生かせたら、若い人の何かを生かせたら、若い人もそこに夢を持って国際協力に来てくれるのかな、活躍してくれるのかなど。単にPRや説明ではなく、生かす場所をどうつくっていくか、NGOライクな生活とJICAライクなつくり方、それから地方行政とのタイアップも含めて、できれば地場産業と組むというようなこともあるかもしれませんが、どう生かすのかを考える時期に来ています。そういうことが考えられるネットワーク、いろいろなセクターとの連携ができるネットワークが必要なのかなど、僕自身は思っています。

岩瀬：閉める前に、いいですか。

中島：どうぞ。

岩瀬：研修業務課の岩瀬です。2点、私のほうからお伝えしたいと思っており、一つはネットワークNGOとしての名古屋NGOセンターへのお願い、もう一つは私が日々関わっている業務の中でのお話になります。1点目のNGOセンターへのお願いとしては、私は研修事業で海外から1カ月ぐらいの形で毎年600~700人の方々を受け入れているのですが、研修事業の中で例えば「こういう視察先に行きたい」、あるいは「こういったところを探している」というとき、なかなかすぐに見つからないときに、NGOセンターに「こういった視察先はないですか」とお伺いして、把握されているNGOセンターの活動の中で「こういう団体さんがおられますよ」と教えていただくと非常にありがたいのかなど思っています。実際に研修事業を丸々受託していただいている障害者支援の「AJU自立の家」さん、廃棄物の研修を受けていただいている「中部リサイクル運動市民の会」という団体さんがある一方で、「この日、この1コマについてお世話になりたい」というときもあって、そういったところで本体事業の中で関わっていただける機会がたくさんあるのかなど思っていますので、そういったリソースの取りまとめをこちらからお伺いして教えていただくところを機能として、いろいろお世話になればと思っているのが一つです。

2点目は、学生さんが非常に内向きだというお話で、大学1年生のときから就職活動にというのは実態としてあるのだろうなと思っています。ただ、研修業務課の中で大学連携も担当しており、いろいろな大学に話に行くこともあります。その中で大学の先生方、あるいはそこに参加している学生の皆さんは非常に世界のことに関心が高く、国際協力についても非常に熱い思いを持って参加していただいているのかなと思っています。私、これまでに今年半期だけで十数の大学の方々といろいろな話を持つことがあったのですが、そういった中でNGOネットワークとして大学でコマを持っていただくなどすれば、もちろん大学さんの関心事項はジェンダーであったり、マイクロファイナンスであったり、環境問題であったりと非常に多岐にわたるかと思うのですが、NGOネットワークに「こういった団体さんから事例を紹介できますよ」と取り次いでいただだけでも、学生の皆さんに直接アピールすることができるのではないかなと思います。2点ですね、JICA事業との関わり、いろいろ視察先を教えたいというところと、2点目は少し差し出がましい話かもしれないのですが、大学とのネットワークを強化することで直接学生さんにアピールする機会が出てくるのではないかなと思っているという、この2点をお伝えさせていただければと思います。

西井：ご意見を聞きながら、どうやってまとめようかなと思ったんですが、目線が内向きになっているとか、あるいは自国中心主義になっているというのは日本だけに限った現象ではなくて、アメリカもそうですし、ヨーロッパ、イギリスでもそういうことが起こっていて、世界的な規模で起こっているのかなというふうに捉えることは、文明史的にはできるのかなと思っています。すごく大きな転換点だろうなというふうに思います。それは、この数十年間にわたり続いたグローバリゼーションに対するある種の反動といいですか、「もう、これ以上はたまらん」というある種の悲鳴がそういう形で現れてきているのではないかなと思います。

それが健全な形でいく場合には、今、日本の若者たちが地方回帰、都会の暮らしでも生活が成り立っていかないのか、地域へ行って新しい活躍の場を見いだそうという動きが一方ではある。それがグローバリゼーションに対するある種の新しい生き方の提示であるだろうと思います。それが不健康な形で現れると、ヘイトスピーチだとか、それから民族差別だとか排外主義といった病的な形で現れてくる。それが今、両方がせめぎあっている状況なのかなと思います。

そういう時期に、SDGsという一つの普遍的な目標が国連という場で決議されて、世界の関心のある人たちがこれを目標にして取り組んでいこうということが公示されたことは、ある種、内向きな面とか、あるいは病的なグローバリゼーションに対する反動とか、そういったものをより健全な方向へ持っていく一つの指針というか、ガイドラインにできるのではないかなと思っていますし、ぜひそれはしていきたいなと思います。ですから、そういう部分で私たちNGOも外の目というか、海外へ目を向ける、そして海外から日本を見るところという情報を持ち込みながら、不健全な反グローバリゼーションのような内向きの反応に対

して、ある種の処方箋のようなものを提示するといったことがNGOの役割としてあるのかなと思います。

と同時に、JICAの皆さん方も日々の海外での活動の経験の中から見えてくるものを絶えず国内に情報として還元しながら、経験知として還元して、地域の人々にさまざまな情報を提供する、考える機会を提供していくという役割が大きいのかなと思います。その部分で、今日皆さんから内向きだとか、国際協力に関する関心が低いといったご意見が出ましたけれども、それに対してNGO、あるいはJICAの人たちも含めて一緒に何かできることがあれば、一緒に知恵を絞っていければいいなと思って聞いていました。以上です。

中島：NGO側の外部の脅威としての弱み。それをまとめていくNGOセンター自体が脆弱で、どうしたらいいかといった見直しをやっているような状況。そういう中で、名古屋NGOセンターへの期待と可能性という、あまりにも厳しい枠の中での意見の聴取だったので、あまり明るい見通しではなかったのですけれども、そういう赤裸々なNGO側の状況もお聞きになった上で、最後またJICAさんのほうで同じ方向を向いて日本の社会を良くしていこうという仲間としてのご意見などを頂ければと思っています。

多田：ありがとうございました。長時間、どうもお疲れさまでございました。お越しいただきましたNGOの皆さま方、それから名古屋NGOセンターの皆さま方、どうもありがとうございました。本日の会を閉会させていただくに当たり、JICA中部の阪倉所長よりごあいさつ申し上げます。

阪倉：今日はどうもありがとうございました。閉会に当たってのあいさつというよりは、今日の話聞いての私のコメントと考えていただいたほうが良いと思うのですが、まず今日の大きなテーマとしてネットワークNGOの役割が挙げられていて、アンケートの結果についてご説明いただき、非常に興味深くお聴きしました。こういうアンケートを取ってまとめることができるのも、やはり名古屋NGOセンターだからだと思いますので、われわれも非常に参考にさせていただけたと思います。それぞれ出された意見、今日、個別のNGOさんから出された意見も、本当になるほどということが多かったです。

ただ、例えば中部地域のNGOさんが脅威と思っておられる、全体が内向きになっているとか、そういうことは本当にそうかなというところもあります。ここJICA中部も1階に「JICA地球ひろば（なごや地球ひろば）」を持っていて、もう8年になるのですが、この10月2日にリニューアルオープンしたところです。ご覧になった方もいるかもしれませんが、そのテーマがまさに今日のテーマでもあるSDGsなのです。SDGsを中部地域の一般の方に知ってもらいたいということでメイン展示にしているのですが、ここのメッセージは「世界の問題は日本の問題」。まさに「SDGsの課題になっていることは、そのほとんどが日本の課題なのです」ということを知ってもらうのが一つのポイントです。ご存じのとおりゴールは1～17まであり、1でまず最初に貧困をなくそうと出てきますが、これはまさに日本の問題でもあるというところから始まって、環境問題をはじめ、いろいろな日本の問題があるということで、言いたかったことは、あまり内向きと考えなくてもいいの

かなと。結局、世界の問題が日本の問題であるのであれば、多分、NGOさんもそうだと思うのですが、国際NGOとして活躍されている、活動されている団体さんが、あるとき日本の国内問題に対応されることもよくあるわけです。だから、あまりそこに垣根をつくる必要もないのかなと思っています。

われわれJICAも最近、民間連携とっていますが、大企業さんとの付き合いはあまりなくて、いわゆる中小企業さん、というよりも例えば数人でやっている有限会社とか、実はそういうところの活動がむしろ途上国には参考になったりするので、すごく立派なきれいな工場を持って活動をしている製造業よりも、三ちゃん農業ではないですが、むしろそういうところのほうが実は途上国の参考になるようなところもあります。日本の、この地域の持っているものを、先ほどの龍田さんの滝川市の話に似ていると思うのですが、地域にあるものを使って途上国支援ができれば、多分それに越したことはないと思います。JICAも、そういう意味では、いろいろな人との関係が出てきたということは確かだと思います。

私も名古屋NGOセンターに登録されている団体さん以外の、任意団体といわれるような小さなところとも時々会ってお話をすることがありますし、そういうところから出てきた意見やコメントをイベントや業務に反映させることもあります。そういう意味では、お付き合いは本当にいろいろだと思いますので、どなたかとも言われたように名古屋NGOセンターが垣根を少し低くして、いろいろなところとのつながりを考えられても、いいのかなというところもあります。

いずれにしても、多分、最終的にはネットワークNGOさんとJICAとの関係は、スライドにも出ていましたが、受益者が期待しているか、受益者のニーズに応えられるかというところで、JICAとNGOさんで何ができるのか、どういう分担をするべきなのかというところが最終的にはやはり大事だと思います。一時期、われわれJICAも、NGOさんのほうから「JICAは大学や自治体、最近でいうと民間企業との関係が強くなって、逆にNGOとの関係が希薄になっているのではないか」というご意見も頂きましたけれども、今の受益者のニーズ、あるいは期待というところを考えると、やはり、JICAにとってNGOさんは非常に近い存在だろうと思います。そういう意味では、そこを大事に考えながら、引き続きいろいろな意見を交わしていければと思っていますので、よろしくお願いします。以上です。

多田：ありがとうございました。それでは、本日の会議をこれにてお開きとしたいと思います。どうも本日はご協力ありがとうございました。

参加者一同：ありがとうございました。

多田：次回またよろしくお願いします。

以上